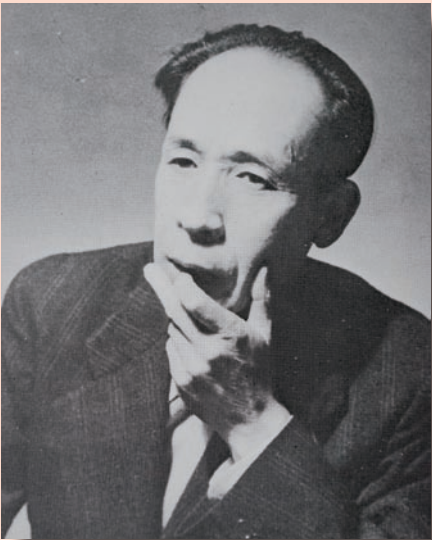


上田 保

防府市
(1906～1973)



昭和25年頃撮影
（「上田保著作集」より）

【著作】

『概説世界文学』（昭和25・創元社）
『エリオット詩集』上田保訳（昭和29・白水社）
『どうだ ぼくらは生きぬいてきた！』ロレンス作・上田保・海野厚志訳（昭和35・国文社）ほか

上田保は昭和のシュールレアリスム理論の中心的人物として注目された文芸評論家、翻訳家、慶應義塾大学教授。

明治三十九年（一九〇六）一月十九日、山口県吉敷郡大道村（現・防府市大道）に生まれた。詩人上田敏雄の弟。妻は詩人上田静栄。

大正十二年、県立山口中学を四年で修了後、四月、慶應義塾大学予科経済学部に入学。大正十四年（一九二五）九月、兄の上田敏雄、徳田戯二、北園克衛らと『文藝耽美』を創刊（昭和二年十一月まで刊行）。ここでルイ・アラゴンなどの翻訳を発表した。慶應義塾大学在学中、教授で詩人の西脇順三郎から強い影響を受け、昭和二年（一九二七）八月、日本における最初の超現実詩派のアンソロジー『馥郁タル火夫ヨ』刊行企画に参加、西脇を中心に佐藤朔が編集し、十二月に刊行した。

この年十一月には、兄の上田敏雄、北園克衛らとともにわが国で最初の超現実主義運動機関誌となった詩誌『薔薇・魔術・學説』を創刊。翌三年（一九二八）の一月には、その第三号に三人の連名で日本における初の自立的シュールレアリスム宣言を発表し、「吾吾はSurréalismeに於ての芸術欲望の発達を謳歌し――吾吾は飽和の徳を讃美する」と書いた。

昭和四年（一九二九）に慶應義塾大学英文科を卒業。その後も『衣裳の太陽』『詩と詩論』『Le Surréalisme International』などの雑誌の中心メンバーとして、翻訳、評論を精力的に発表し続けた。昭和九年（一九三四）から十六年（一九四一）まで第一書房に勤務、編集者として雑誌『セルバン』で海外文化情報紙の翻訳・紹介をする傍ら、昭和十二年（一九三七）から『新領土』（アオイ書房）の編集者も兼ね、第四十七号まで、一九三〇年代の社会派詩人たちの紹介、翻訳、批評を行った。

早くから英文学者として活躍した保は、昭和十六年（一九四一）四月、慶應義塾大学予科教員となり、同年十二月、オルダス・ハックスレイの旅行記『東方紀行』を翻訳出版した。

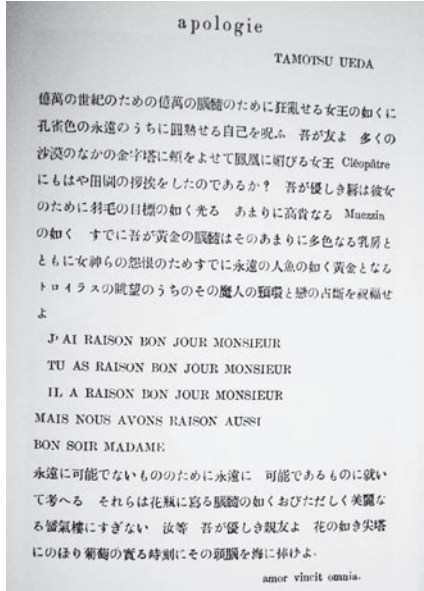
昭和二十四年（一九四九）、慶應義塾大学経済学部教授となり、戦後はエリオット翻訳の第一人者として活躍した。

著書に『概説世界文学』『現代ヨーロッパ文学の系譜』『ヨーロッパ文学入門』など、訳書には『エリオット詩集』や『東方紀行』のほか、エズラ・パウンド『世界文学の読み方』などがある。海野厚志と共訳した『ど

うだ ぼくらは生きぬいてきた！』は昭和四十五年（一九七〇）十一月、第七回日本翻訳文化賞を受賞した。昭和四十八年（一九七三）四月十一日、六十七歳で没す。没後、『上田保著作集』『象徴主義の文学と現代』が刊行された。（文・森川信夫）



主要著作



詩選集『馥郁タル火夫ヨ』に発表した上田の詩

上田 保 年譜

（提供・森川信夫）

明治39（一九〇六）年

十七歳

大正12（一九二三）年

十九歳

大正14（一九二五）年

二十一歳

昭和2（一九二七）年

二二歳

昭和3（一九二八）年

二三歳

昭和4（一九二九）年

二四歳

昭和5（一九三〇）年

二五歳

昭和9（一九三四）年

二八歳

昭和12（一九三七年）年

三一歳

昭和13（一九三八）年

三二歳

昭和14（一九三九年）年

三三歳

昭和16（一九四二年）年

三五歳

昭和24（一九四九年）年

四三歳

昭和25（一九五〇）年

四四歳

昭和28（一九五三年）年

四七歳

昭和29（一九五四年）年

四八歳

昭和31（一九五六年）年

五〇歳

昭和32（一九五七年）年

五一歳

昭和35（一九六〇）年

五四歳

昭和37（一九六二年）年

五六歳

昭和40（一九六五年）年

五九歳

昭和43（一九六八年）年

六二歳

昭和45（一九七〇）年

六四歳

昭和47（一九七二年）年

六六歳

昭和48（一九七三年）年

六七歳

《没後》

昭和50（一九七五年）年

六九歳

昭和52（一九七七年）年

七十一歳

1月19日、山口県吉敷郡大道村（現・防府市大道）に生まれる。

3月、県立山口中学を四年で修了。4月、慶應義塾大学予科経済学部入学。

9月、兄の上田敏雄らと文芸雑誌『文藝耽美』（徳田戯二主宰）創刊に参加。昭和2年（一九二七）11月終刊。

8月、日本における最初の超現実詩派のアンソロジー『馥郁タル火夫ヨ』刊行企画に参加（西脇順三郎を中心に佐藤朔編集。12月に刊行）。11月、上田敏雄・保兄弟及び北園克衛ら、詩誌『薔薇・魔術・學説』（日本における最初の超現実主義運動の機関誌）創刊。（昭和3年2月終刊。）

1月、上田敏雄・保兄弟及び北園克衛の連名で、日本における最初の自立的なシュールレアリスム宣言を発表（『薔薇・魔術・學説』第3号）。11月、『詩と詩論』に参加。兄の上田敏雄らと詩誌『衣裳の太陽』創刊。誌名は上田敏雄の発案。シュールレアリスム運動の機関誌。（昭和4年7月終刊。）

3月、慶應義塾大学英文科を卒業。

1月、兄の上田敏雄らと『衣裳の太陽』を発展させた、超現実主義機関誌『Le Surréalisme International』を創刊。

6月25日、詩人友谷シズエと結婚。第一書房に勤務。昭和16年（一九四一）まで編集者として雑誌『セルバン』で海外文化情報の翻訳・紹介をする。

5月、詩誌『新領土』創刊（47号まで上田保編集。昭和17年1月終刊、全56冊。）

8月、『荒地Ⅰ 死者の埋葬』（エリオット作◇上田保訳）を『新領土』に発表。

4月、『荒地Ⅱ 将棋遊び』（エリオット作◇上田保訳）を『新領土』に発表。

6月、慶應義塾大学予科教員となる。12月、『東方紀行』（オルダス・ハックスレイ作◇上田保訳）を刊行。

慶應義塾大学経済学部教授となる。

11月、『概説世界文学』を刊行。

5月、『世界文学の読み方』（エズラ・パウンド作◇上田保訳）を刊行。

10月、『エリオット詩集』（上田保訳）を白水社より刊行。

9月、『ジョコンダの微笑・尼僧と昼食』（オルダス・ハックスレイ作◇上田保ほか訳）を刊行。

4月、『現代ヨーロッパ文学の系譜』を刊行。

12月、詩集『どうだ ぼくらは生きぬいてきた！』（ロレンス作◇上田保・海野厚志訳）を刊行。

4月、『ヨーロッパ文学入門』を刊行。

9月、『エリオット詩集』（上田保・鍵谷幸信訳）を思潮社より刊行。

11月、『エリオット詩集』（上田保・西脇順三郎訳）を新潮社より刊行。

11月21日、ロレンス詩集『どうだ ぼくらは生きぬいてきた！』（海野厚志と共訳）により、第7回日本翻訳文化賞を受賞。

3月、慶應義塾大学経済学部を定年退職。

2月、『エリオット詩集』（上田保訳）を角川書店より刊行。4月11日、没。享年67歳。

7月、『上田保著作集』刊行される。

9月、『象徴主義の文学と現代』刊行される。

子供時代の大部分を、瀬戸内海に面した田舎ですごした私は、おじいさんの代まで造り酒屋をやっていたので、井戸が五つもある大きな屋敷に住んでいて、中学へはいるときに先生に聞いた以外には、自宅でどのようにして勉強していたのか、あまり記憶がありません。ただ山や海や田圃にかこまれた環境のなかで、魚や雀や空気銃や舟や投網や竹竿や釣針やコマや竹馬や将棋や友だちや、また木にのぼって蜜柑やアンズや梅や野生の果物をとったことなどが思いだされます。当時、読んだものとしては少年雑誌やトルストイの童話―『イワンの馬鹿』や『光あるうちに光の中を歩め』などが、霧やモヤのむこうから、かすかに現われてきます。

ただ、子供というものが、大人とちがった独特の人格をもっていて、そこには、さまざまな悩みや苦しみや愛の生活があるというところを、D・H・ロレンスは『虹』のなかで、実に見事に描きあげています。

中学へはいつてから読んだもののうちで、私の心の一隅にいまでも残っているものは、芥川竜之介の知的な諷刺と皮肉な心理解剖をまじえた小説や、谷崎潤一郎の耽美的で官能的で、やや悪魔的な初期の作品、たとえば『刺青』や『異端者の悲しみ』などや、日本のハイネともいふべき石川啄木の生活に密着した、精神をつきさすような反抗と知的な抒情味にあふれた作品であります。抒情詩の本質が、人間の感情的な面を、あまゝ感傷的な方法でとりあげた流行歌的なものであると考えるのは、大きな間違いであります。

（上田保「わたしの読書遍歴」『三色旗』昭和47年5月掲載より）